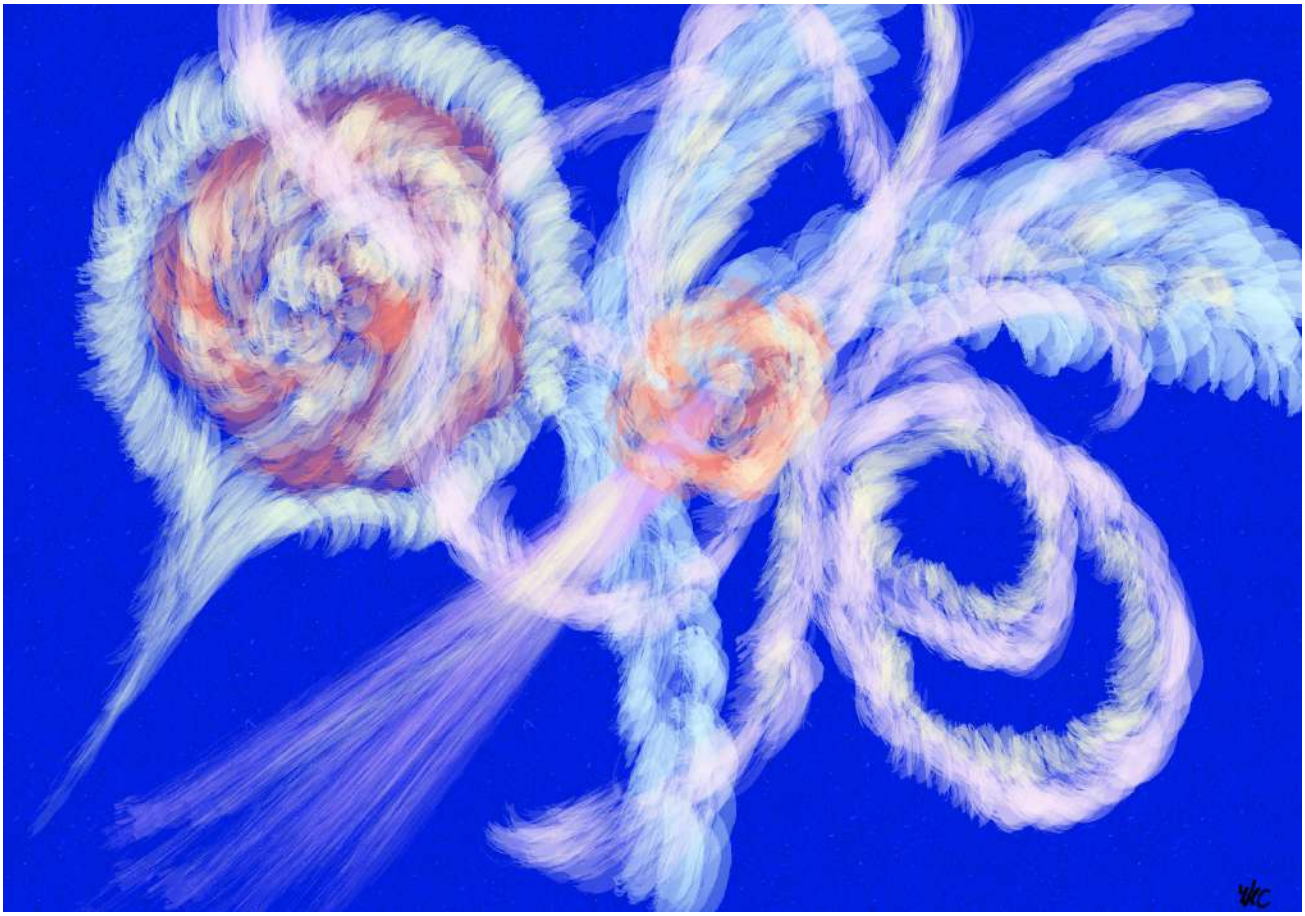
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 321

Website:「発達理論の学び舎」



No.1548 朝光の渦_A Vortex of Morning Light

© YOHEI KATO 2020

目次

6401. 今朝方の夢

6402. 新たな食生活/映像作品をもとにした講座に向けて

6403. 今朝方の夢と教会旋法の響き

6404. ヨナコンプレックス/今朝方の夢

6405. デヴィッド･リンチとの出会い

6406. 今朝方の夢

6407. 本日の映画鑑賞より

6408. 今朝方の夢

6409. 園子温監督の作品を見て

6410.『鏡の中にある如く(1961)』を見て/今朝方の夢

6411. 芝居が持つ治癒と変容効果:『大鹿村騒動記(2011)』を見て

6412. 今日の計画/今朝方の夢

6413. 本日の振り返り/『みなさん、さようなら(2012)』を見て

6414. 今朝方の夢

6415. 今朝方の夢の示唆とその他の夢

6416. 澄明な夜の世界の中で

6417. 今朝方の夢

6418. 換喩的な還元と飛躍/犯罪系映画から考える悪について

6419. 情報過剰な日本の街

6420. 日本の閉塞感/今朝方の夢

6401. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えようとしている。真っ暗な外の世界を眺めながら、今朝方の夢について振り返っている。最初の夢の場面では、私は父が運転する車に乗っていて、ナビ役を務めていた。目的地は不明だったが、北東の方向に進むことを父に告げていた。そのような場面があったことを覚えていて、そこで1度目が覚めた。目覚めた時に、北東の方角について考えを巡らせていた。

今いるフローニンゲンから北東の方向には、コペンハーゲン、ストックホルム、そしてヘルシンキがある。それらの都市にはいずれも足を運んだことがあり、それらが一直線でつながっていることの不思議さを思う。過去の旅を結び、旅での経験を再統合することを示唆している夢だったのだろうか。そして、ここからヘルシンキでの生活に向けて歩みを進めていくことを示唆している夢だったのかもしれないと思う。

次の夢の場面では、見慣れない日本の土地にいた。そこは山の中にある住宅地だった。そもそもその土地は、人口が多くなく、住宅地も閑散とした雰囲気を放っていた。私は、ある集合アパートの近くを歩いていて、どういうわけか、アパートを仕切る壁をボルダリングのように登っていた。途中で数多くの洗濯機のようなものが壁に埋め込まれていることに気づき、手がかけれそうな部分を洗濯機に見つけながら壁を進んでいった。

あるところで私は、壁の天辺に置かれていた2つの小瓶を地面に落としてしまった。それらの瓶には何か飲み物が入っていたらしく、地面に落とした時、その飲み物が飛び散った。地面には若い男性が2人いて、とてもびっくりした様子を見せており、「誰がこんなことをしたんだ！」というようなことを言葉荒げに叫んでいた。私はとっさに身を隠し、すぐさま壁から降りた。

幸いにも彼らには怪我がなかったようにであり、そこから私はさらに先に進んで行った。すると、目の前に分岐路が現れた。片方の分岐路は、目の前に蜘蛛の巣が張られていて、もう一方の分岐路の方にも、その出口に蜘蛛の巣が張られていた。

私は足元に落ちていた棒を拾い上げ、それを使って蜘蛛の巣を払い避けた。ところが、思った以上に蜘蛛の巣が大きく、枝だけでは全ての蜘蛛の巣を払い避けることが難しかった。それでもあらか

た蜘蛛の巣を払い避けることができたので、そのまま進むことにした。すると、目の前に芝生の公園が現れた。そこには、小中学校時代の親友たちがいた。

何やら、私たちは今学校の宿泊訓練か何かに参加しているらしく、午後6時まで公園で遊ぶことが許可されているらしかった。日が暮れる時間が早くなっている時期でもあったので、もう20分ぐらい公園で遊び、早めに帰ってみんなでゆっくり風呂にでも入ろうということになった。そこから私たちは、サッカーの鳥かごの遊びをみんなで行って盛り上がった。今朝方はそのような夢を見ていた。

とりわけ蜘蛛の巣のシンボルが印象的だったので、早速その意味について調べてみた。蜘蛛そのものが意味することと、蜘蛛の巣のシンボルにはかなり多くの意味があることがわかった。夢の中では蜘蛛の姿を見ることはなかったので、蜘蛛の巣だけに限ってみた時に、夢の自分の行動と今の自分の現状とを鑑みてその意味するところを紐解いてみると、これまで取り組んできたことの成果を収穫する時期にあるのかもしれないと思った。

蜘蛛の巣を枝に巻き付けたことは、これまでの取り組みの成果を回収することを示唆しているように思えたのである。また、そもそも蜘蛛の巣は、インターネットやグローバルコミュニケーションを象徴しているという側面もあるらしく、その観点で言えば、世界との繋がりをより深めていこうとしている自分がいることを象徴しているのかもしれないと思った。それは意識下･無意識下、双方の意味での繋がりである。今日は久しぶりに印象的な夢を見ることができた。今日はそれがなんらかの形で日常生活の中に流れ込んでくるかもしれない。フローニンゲン：2020/11/13（金）07:12

6402. 新たな食生活/映像作品をもとにした講座に向けて

時刻は午前7時半に近づいてきており、空がダークブルーに変わり始めた。おそらくここから数週間が最も日の出の時間が遅くなり、日没の時間が早くなる期間だと思われる。

今日は午前中には太陽が少しばかり顔を覗かせるようだが、総じて曇りのようであり、夕方には小雨が降るらしい。そうしたこともあり、正午のオンラインミーティングを終えて、仮眠を少し取ったら、雨が降る前に近所のスーパーに出かけたいと思う。

オランダに戻ってからの食生活は極めて良好であり、チーズを食べることをやめてから、夕食がさらに軽いものになった。消化の速度の違いを実感していて、チーズの代わりにケールを取り入れることにした今の食事は自分に合っているようだ。チーズを摂取しないことによって、完全に乳製品を断つことになった。以前から卵も摂取していなかったので、現在は完全にヴィーガン食を摂取していることになる。

乳製品や卵を摂取しないことに伴って、タンパク質やその他の栄養素については他の食品から摂取するように心がけている。今のところ、何か栄養が不足して症状が出てくるというようなことはなく、むしろ調子が良いので、引き続きこの食実践を継続していこうと思う。

今日はこれから絵を描き、早朝の作曲実践を行う。その後、正午のオンラインミーティングまでは映画を見たり、それと交互に作曲をしていく。毎日、映画を選定する楽しみとそれを見る楽しみがある。結局、昨日はNetflixと契約することはなかったので、今日の午後にでも時間を作って契約を済ませたい。

Netflixで2作品、U-Nextで2-3作品ぐらいを毎日見ていくことがちょうどいいリズムだろうか。ここ数日間は毎日5本ほど映画を見ていて、それらの日はいずれもオンラインミーティングがあったので、そうした仕事がなければ、6本ほどは無理なく見れそうだ。

昨日偶然ながら、ある協働者の方と映画の話になり、今度、映画を通じて成人発達理論やインテグラル理論を学んでいくような講座を作るのはどうかという話になった。学術書を取り上げると、どうしてもハードルが高くなってしまうようであり、映像作品であれば比較的それらの理論の学習に入っていきやすいのではないかという話になった。確かにそうだと私も思うため、今後は、そうした講座の実現に向けて、テーマごとの映画をリストアップしていくという観点で作品を見ていこうと思う。

読書よりも映像作品を見ることに時間を充てていることもあって、毎月一括注文していた書籍の数が自然と減ることになった。そもそも、今はそれほど購入したい書籍がなく、敢えて購入したい書籍を挙げるとするならば、映画評論関係の学術書と死生学（thanatology）に関する学術書ぐらいだろうか。死生学に関しては、この分野の研究で有名な精神科医のエリザベス･キューブラー＝ロスのことを以前から名前は知っていたのだが、まだ彼女の書籍を読んだことはなく、今度書籍を注文する

際には、彼女の書籍を数冊ほど購入してみようと思う。ここからしばらくは映像作品を主にして、書物を補助的なものとする形で探究を進めていきたい。フローニンゲン：2020/11/13（金）07:37

6403. 戦争倫理/“aperspectival madness”について

時刻は午後7時半を迎えた。今日は午後にぱらつく小雨が降ったが、今は雨が止んでいて、穏やかな夜の世界が広がっている。

ここ最近は、本当に日暮れが早くなった。午後2時頃に買い物に出かけた際に、その時には小雨が降っていたこともあってか、もうその時間帯で随分と暗く感じられた。ここからまだ日没の時間は早くなり、日の出の時間が遅くなっていくだろう。このところは天気予報が外れやすく、今週は晴れの日が多いという予報のはずだったのだが、それがすっかり変わり、終日雨マークになっている。

もちろん、オランダでは1日中雨が降るということは滅多にないのだが、やはり晴れマークを望む自分がいる。今この瞬間の天気予報も当てにならないので、もしかしたら今の雨マークが晴れマークに変わることもあるかもしれない。

今日も結局5本ほど映画を見た。いずれも印象に残っているが、『アイ･イン･ザ･スカイ　世界一安全な戦場（2015）』という作品を見て、ドローンによる攻撃は、まるでシューティングゲームのように感じられ、作中においては、そうした非道な攻撃に対して登場人物のほとんど――主人公の大佐は怪しい――が倫理的なジレンマを感じていた点は救いかもしれないと思った。今後ドローンを用いた戦争の数が増えていくに従って、こうした倫理的なジレンマを感じにくくなってしまい、ドローンを用いた殺戮に関する倫理感が消失してしまうのではないかと大いに危惧した。そもそも戦争倫理とは何なのだろうか？そのような問いが改めて立つ。

その他の映画を見ながら、ケン･ウィルバーが指摘する“aperspectival madness”について思う。「真実など何もないのだ」という信念によって、つまりいかなる視点も普遍的な妥当性を帯びないという信念が推し進められることによって、社会の中に大規模な自己矛盾的現象が起こっている。ウィルバーも指摘していることだが、視点が溶解してしまうこうした狂気によって、集合規模の進化は方向性を見誤ってしまう危険性がある。こうしたモチーフもいくつかの映画に見られることは見逃せな

い。明日もまたいくつかの映画作品を積極的に見ていこうと思う。フローニンゲン:2020/11/13(金)20:00

6404. ヨナコンプレックス/今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。早いもので、フローニンゲンに戻ってきてからの1週間が過ぎ去り、今日から週末を迎えた。

この瞬間の外の世界は、闇と静寂さに包まれている。フローニンゲンに戻ってきてからの生活は、やはりとても落ち着いていた。心底寛げる自宅で、自らの取り組みに従事し続けるような1週間であり、こうした生活を続けていけることの有り難さを思った。今日もまた、作曲実践に励み、映像作品を見ていこう。そして、日記を少々書き、絵も少々描く。そうした形で今日という日を形作り、人生を形作っていく。

今、名状し難い幸福感を感じている。映像作品の鑑賞を意識的に行うことによって、人生がさらに豊かになっているような気がする。映像作品は、単に自分や世界を知るための道具なのではなく、自己や世界の癒しと変容につながる芸術作品であることを思う。

旧約聖書のある物語を思い出す。ヨナは、イスラエルの敵国であるアッシリアに赴いて、アッシリアが40日後に滅ぼされるということをアッシリア人に伝えよという予言を神から受ける。しかしヨナは、神のお告げを聞いたのに、それを実行しないで逃げ出した。何かの瞬間に、自分の心の声を聞く瞬間というものがある。そうした真実の声を聞いたとき、その声に従うのか、それともしないのか。そうした判断が迫られる瞬間は誰しもが1度は経験することだろう。

この物語は、アブラハム·マズローが提唱した「ヨナコンプレックス」という概念の基になっている。自らを愛し、自らの尊厳を大切にするというのは、自分に付与された可能性を最大限に発現させていくことであるが、それを拒絶することをマズローはヨナコンプレックスと呼んだ。

自己が獲得した知見や技術、そうしたものを共有し、それを積極的に伝承していくことに躊躇することもまた、ヨナコンプレックスの現れかもしれない。ヨナコンプレックスに関しても、それは映画作品の中で時折モチーフとして登場する。そう考えてみると、ギリシャ神話を含め、実に様々な神話で取り

上げられているモチーフが現代の映画で使われていることが見えてくる。ちょうど手元には、世界の神話に関する辞典があるので、映画探究と並行して、神話の探究も進めていこうと思う。

昨日は印象に残る夢を見ていたが、今朝方の夢についてはそれほど記憶に残っていない。舞台は外国の落ち着いた街だったことは覚えている。そこは人口密度が高くなく、静かな街であった。最初私は、夢の登場人物として現れていたが、途中からは、夢を俯瞰的に眺める者になっていた。目覚めてしばらくは、覚醒した自分自身、そして自らの人生を俯瞰的に眺めている状態が続いていた。それは幾分不思議な感覚を伴う体験だった。フローニンゲン：2020/11/14（土）06:29

6405. デヴィッド･リンチとの出会い

時刻は午後8時を迎えようとしている。今日もまたとても充実した1日だった。

今日は、窓の外の景色を忘れるぐらいに映画を見ていたように思う。結局今日は、7本の映像作品を見ていた。今の自分は、自分の内側の何かしらの渇きを癒すために映画を貪るように見ているのかもしれない。映画でしか満たされないものに気付いてしまった自分がいて、それを必死に満たそうとする自分が自然といる。そう、絶望的な何かを持った自分が自然といるようなのだ。それゆえに、極めて中立的な自分がいることにも気づく。

本日見た7本の映像作品の中で印象的だったのは、映画監督のデヴィッド･リンチを取り上げたドキュメンタリーの『デヴィッド･リンチ：アートライフ（2016）』という作品である。映画にせよ、ドキュメンタリーにせよ、映像作品を見ながら走り書きのメモを取るようにしていて、そのメモに書かれていることを文章の形にしてここに書き留めておく。

デヴィッド･リンチの母は、リンチの才能を早期に見出していて、弟や妹に与えていた塗り絵をリンチに与えなかった。なぜなら、塗り絵という型がリンチの創造性の足かせになると判断したからである。このような判断ができるリンチの母親は、彼の才能を見出す慧眼があったのだろう。

リンチは、高校に行くまで、自宅の周辺にしか世界が広がっていなかったと言う。しかし、そうした狭い世界の中に無限の世界を見出して楽しむ力が彼にはあった。そうした特性は、大学時代や現在

の生活においても現れていて、内なる無限の世界の中に住まおうとする性質は自分と似ているものがあると思い、共感の念を持った。

このドキュメンタリーの中で、リンチの両親は仲が良く、子供にも愛情を持って接していたことが伝わってくるのだが、リンチが高校時代に非行に走ったわけや、彼の映画の中に投影されている心の闇はどういうところから生まれたのかが気になった。その点については、このドキュメンタリーを見てもわからなかった。

鬱屈した高校時代を過ごしたリンチは、ある日、電流が走るように、「画家になるのが自分の道だ」と閃いた。そして大学時代には、ある時ふと「動く絵画だ」という閃きから映画撮影に乗り出していった。何か自分の道を直感的、あるいは天啓的に掴む力がリンチにはあり、それもまた自分と重ねて眺めている自分がいた。

このドキュメンタリー作品をきっかけに、リンチの処女作である『イレイザーヘッド リストア版(1976)』を次に見た。端的には、大変興味深い作品だった。とりわけ、グロテスクな描写を見ることによって、自分の中のグロテスクな部分が癒されるような感覚があったことが印象的である。これもまたこうした作品の効果なのだろう。

作品の中で、赤ちゃんが奇妙な生物として描かれていて、主人公の首が吹き飛び、その中から赤ちゃんと同じ生物が出て来たことは、私たちの内側にはあのような化物がいるということの暗示だろうかと思った。何かを満たそうとして映画を貪るように見ている今の自分を大切にし、映画によって何かが掴めるまで貪るように見ていく。明日も時間が許す限り映画を見ていこう。フローニンゲン:2020/11/14(土)20:08

6406. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。早いもので今週末も今日で終わりであり、明日からは新たな週を迎える。

今、外の世界は静寂に包まれている。闇の黒さは心地良く、深い闇が心を落ち着かせてくれる現在、世界はコロナで未曾有の状況であるが、自分の内面世界の落ち着きは変わらない。むしろこうした世界情勢だからこそ、平穏さを内側に保っておきたいと思う。

今朝方は午前1時頃に、ベッドから飛び起きた。何かしらの夢を見ていて、夢から覚めた瞬間に目を開けると、赤くて大きなクモがベッドの上を這いつくばっているかのように錯覚し、ベッドから飛び起きたのである。それは完全に錯覚だったのだが、意識状態が移行している過程においては、こうした錯覚を見ても何ら不思議ではないことを改めて思った。そこからまた入眠すると、再度夢を見た。

夢の中で私は、実際に通っていた日本の大学のキャンパスにいた。どうやらマクロ経済学とミクロ経済学の試験が迫って来ているため、図書館で勉強しようと思っていた。厳かな雰囲気を発している図書館で、まずは席を確保しようと思った。ちょうど試験週間なのか、随分と多くの学生が図書館で勉強していて、席を見つけるのは難しかった。席に置かれている書物から察すると、経済学部と法学部の学生が多い印象だった。

ある学生の席を見た時、ちょうど自分が受講しているマクロ経済学のテキストが広げられていた。それを見た時、私はまだテキストを持っていないことに気づき、まずはそれらを購入しに生協に向かった。

その図書館は時計塔の中にあり、その時計塔には教室もあった。生協に向かう最中に、ある教室の前で立ち止まった。教室の扉が開いていて、これから授業をするところのようだった。どのような授業が行われようとしているのか関心があったので、教室を覗いてみると、どうやら法学部の授業のようだった。教室の後ろの方の席に、第二外国語で同じクラスの友人が座っていて、何やら内職をしているようだった。

彼はロースクールの入学試験に向けて勉強していることが遠くからでもわかった。結局私はその授業に参加することをせず、その場を後にした。すると、時計塔の下で、小中高時代の友人（AF）と偶然出会った。彼もどうやら試験に必要な学術書を購入したいらしく、それらの本は生協になかったようなので、私は彼に、ハーバードスクウェアにある本屋で注文したらどうかと提案した。

すると、私たちのそばを通りかかろうとしていたアメリカ人の恰幅の良い中年女性が日本語で私たちに話しかけ、彼女が書店に尋ねてみてくれると言う。私たちはその女性の厚意に甘え、彼女にお願いすることにした。気がつくと、私は大学のどこかの教室にいた。そこでは、小中高時代の別の友人

(HY)が高校数学の漸化式を用いた確率の問題を解いていて、彼は見事に完答した。私は彼がその問題を解き切った様子を見て、自分が初見でその問題を解くことになった場合に、果たして完答できるだろうかと立ち止まって考えた。

教室には午後の柔らかな日差しが差し込んでいた。左側の窓が開いていて、そこから入ってくる風がカーテンレースを揺らしていた。フローニンゲン:2020/11/15(日)06:28

6407. 本日の映画鑑賞より

時刻は午後7時半を迎えた。天気予報の通り、先ほど強い風を伴う雨が降った。風の轟音がフローニンゲンの街を走り抜けて行き、雨滴が激しく書斎の窓ガラスにぶつかっていた。

今日はドキュメンタリーを1つ(『世界終末の予言(2016)』)、映画を5本(『ヒア アフター(2010)』『コンテイジョン(2011)』『感染列島(2008)』『女は二度決断する(2017)』『ブルーベルベット(1986)』)見た。先ほど6本目の映画を見ていたのだが、途中でそれを見ることをやめ、残りは明日見ることにした。

本日見た映画のうち、『コンテイジョン(2011)』と『感染列島(2008)』は、ウィルスの感染がテーマになっていて、今の世界情勢と絡めて意図的に作品を鑑賞した。ウィルスの感染をモチーフにした映画は、古くはもう何十年も前に存在していることを知り、2000年代になってからは、本日見た作品以外にもまだいくつかあるため、日を空けてそれらの作品も見て行きたいと思う。

それらの作品は、ウィルスの感染をどのような角度から描き出すのかに表面的な違いが見られるが、共通して描かれているものが必ずあるように思える。それは、ウィルスの感染に伴う人間の実存性や正義感、さらには倫理観といったものである。ただし、それをどのように描くかはやはり監督ごとに異なるように思え、そうした相違を見出していく過程の中で、それらのテーマを考えていくことが大切になるだろう。

続いて見た『女は二度決断する(2017)』と『ブルーベルベット(1986)』においては、作品の中に何気なく登場する生き物や物が重要な意味を持っていることに気づき、今後は、そうした作品中の事物が意味することをより深く理解して行きたいと思う。このあたりもそうした辞典があれば便利だが、

そうしたものがなければ、それらの事物に意識が向かう都度、それらの事物が意味することを自分なりに考えていきたいと思う。まさに、夢日記の執筆の際に時折行っているように、シンボルの意味を自分なりに解釈していくのである。

明日はオンラインミーティングが1件あり、午後からは街の中心部に買い物に出かけたいと思うので、今日ほど映画を見ることができないかもしれない。創作活動と同じで、無理をせず、楽しみながら映像作品を鑑賞していくことを忘れないようにする。

現在貪るように映像作品を見ているのは、そこに何かしらの楽しみや喜び、さらには享楽のようなものを見出しているからに他ならない。明日からの新たな週において、気づきをもたらしてくれる映像作品と出会えることがとても楽しみである。フローニンゲン：2020/11/15（日）20:00

6408. 今朝方の夢

新たな週を迎えた。時刻は午前6時を迎えたところである。今、小雨がパラついていて、外はとても寒い。ここ最近はもう、寝室の暖房をつけるようになった。今週末から一歩寒さが増すようなので、そろそろ湯たんぽを使うことを考えようと思う。

真っ暗な外の世界を眺めながら、今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、実際に通っていた高校の体育館にいた。どうやら今はスポーツフェスティバルの最中のようであり、学年問わず、クラス対抗で行われるバスケの試合に私は参加していた。ちょうどこれから試合があり、対戦相手のクラスには、中学校時代にバスケ部の副キャプテンを務めていた友人（HY）がいた。私は彼とマッチアップすることになり、それはとても楽しみだった。

うちのクラスにはガードを務めてくれる友人がいたので、コート上のボール運びは彼に任せることにし、自分は点を決めることだけに集中しようと思った。試合開始早々、彼は私に絶妙なパスをしてくれ、すぐさまロングシュートを1本気めた。そのシュートはネットに直接吸い込まれて行き、回転のかかったボールがネットに入っていく瞬間のあの何とも言えない音を聞いて、恍惚感を覚えた。私は思わず雄叫びを上げて、体育館を埋め尽くす観衆にパフォーマンス的な仕草を取った。そこから私はもう相手も仲間も見ずに、自分にボールが回って来たらゴールを決めることしか考えていない状

態になかった。その次に放ったシュートもまた恍惚的な音をネットから発する形でゴールに決まり、絵も言えぬ感覚に浸っていると夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はその体育館の倉庫にいた。倉庫の中には小中高時代の友人が何人かいて、彼らは椅子に腰掛けていた。学年で一番背の高かった友人(YK)が足を椅子から放り出して伸ばしていたところ、彼の足の上をまたぐ形で私は移動し、倉庫の外に出ようと思った。すると、気がつけば私はもう倉庫の外にいて、道路を走る車の中にいた。

その車の運転手は、見慣れない外国人だったが、彼は日本語が話せた。車内には数名ほど友人がいた。しばらく道路を走ると、運転手が突然車を止めた。どうやら台風か何かの自然災害の影響で、道路が水浸しになってしまっていて、そこから先は前に進めないとのことである。

仕方ないので私たちはそこで車を降りることにして、歩いて目的地に向かうことにした。私たちが車を降りた時、その車はもう少し先までゆっくりと進んでいった。その車がどこまで先に進めるのか不明であったが、まだ幾分車を走らせることができたようだった。

最後の夢の場面では、私は薄暗い部屋にいた。そこは先ほどの体育館の倉庫のようだった。そこで私は、ある小柄な女性に声をかけられた。その女性は、日本人のようなそうでないような外見をしていた。彼女は手に解答用紙を持っていて、見ると世界史か何かの試験の答案だった。そう言えば私もその試験を受け、解答時間があまりに短かったのと、問題が難しく、さらには自分の不勉強もあって、思うように問題が解けなかったことを思い出した。

その試験は単なる暗記形式ではなく、出題者の先生がかなり工夫を凝らしていて、それがなお一層問題を難しくしていた。おそらく平均点は30点ほどではないかと思う。私はあまり気乗りしない形で、次に迫っている別の試験の勉強に取り掛かることにした。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/11/16(月)06:28

6409. 園子温監督の作品を見て

時刻は午後8時を迎えた。今日は、実際の気温とは違って、身に染みるような寒さがあった。数日前から考えていたように、今夜から湯たんぽを使って寝ようと思う。

本日より「一瞬一生の会」の第3期が始まった。今回は、受講者の方が6名と少人数なのだが、その分、密な関係性でこれから6ヶ月間学びを共にできるように思う。本日の初回は、オランダ時間の午前10時からスタートした。実はその前に、すでに3本ほど映像作品を見ていた。

まずは昨日からの続きとして、園子温監督の『恋の罪（2011）』を見て、本作が人間の実存的側面と内在的な狂気さを見事に描いていたことに感銘を受け、その後に園監督自身についてもっと知りたいと思い、『園子温という生きもの（2016）』というドキュメンタリーを見た。このドキュメンタリーを受けて、さらに園監督の作品が気になり、10時までまだ時間があったので、『自殺サークル（2002）』というこれまた印象的な傑作を見た。

この作品は集団的狂気を描いていて、グロテスクな描写も多々あったのだが、考えさせられることが非常に多い作品だった。本来であれば、映画の世界に（あるいは「映画の世界から」）離陸して行き、そこから現実世界に戻って来て、意識状態を整えてから仕事に取り掛かるべきかと思うのだが、ある種の変性意識状態のままで一瞬一生の会の初回のクラスに突入する形になった。この点については、会のために作成している音声ファイルの中で言及しておいた。エンドロールが終わった瞬間においては、会の開始5分前だった。音声ファイルの中でも言及したのだが、次回は状態を整えるために、仮に会の前に映画を見たとしても、15分前には見終えておいて、呼吸を整えるなり何なりをしておきたい。

園監督はその他にも優れた作品を多数作っているようなので、それらについてもこれから見ていきたいと思う。先ほど見た『ひそひそ星（2015）』を除いて、視聴予定の映画リストの中に、園監督のものは8作品ほどある。昨日から見かけていた『恋の罪（2011）』の傑作たるゆえんについては音声ファイルの中で随分と時間を割いて説明をしていた。何かが満たされないような反復する日常を私たちはきっと誰しも経験したことがあるだろうし、現在進行形でそれを感じている人もいるだろう。

そうした単調的に反復される日常を生きている中で、何かをきっかけにして、繰り返される単調な日常にふと気づく瞬間があり、またそれをきっかけにして、享楽や狂気への道へ踏み出す瞬間があるというのが人間の内在的な特性だろう。カフカの作品を引用する形で映画の中で出て来た、「人は城を探しているが、誰も城に辿り着けない」という言葉が印象に残っている。確かに人は様々な理

想を持ち、それを追い求めるが、決してそれに辿り着くことはないという、理想を取り巻く不条理についてその言葉は示唆してるのかもしれない。

『自殺サークル(2002)』という作品は幾分古い作品だが、作品で描写されている集合的狂気さは、今も変わらず、いやそれ以上に度合いが増した形で日本社会に横たわっている。それを私は、今回日本に一時帰国して大都市のみならず、地方都市において感じた。

こうした作品の価値は、集団的な病理を描くことにとどまるのではなく、それを描くことによってもたらされる集団的治癒の可能性にあるのではないかと思う。対象に埋没するのではなく、対象を客体化させることはセラピーの基本原理であり、そうした観点において、本作のグロテスクな描写や狂気さは、むしろ社会の暗部に光を当て、それを癒すことにつながっている側面も多分にあるだろう。

少なくともこの作品を見た時に、自分自身の中で一種のカタルシスやヒーリングが起こっていたことを見ると、集合規模においては、こうした作品が多くの人に見られることによって、狂気さの一歩手前で踏みとどまる安全弁としての機能があるのではないかと思えてくる。昨日見ていたデイヴィッド・リンチ監督の作品にもそうした力が多分にある。園監督とリンチ監督の作品にはまだまだ見たいものがたくさんあるので、明日からも引き続き彼らの作品を見ていこう。今日は色々とやることがあったので、5本しか映像作品を見ることができなかったが――今日からアニメ『鬼滅の刃』を見始めたので6本とカウントできなくもないが――、焦ることなく、それでいて当面は貪るように膨大な量の映像作品を見ていこうと思う。フローニンゲン:2020/11/16(月)20:28

6410.『鏡の中にある如く(1961)』を見て/今朝方の夢

時刻は午前7時半を迎えた。今、空がダークブルーに変わり始め、小鳥たちが朝の合唱を行っている。彼らの鳴き声から推測すると、今日の彼らはとても元気そうだ。今朝は少し小雨が降っているのだが、それはじきに止むという予報が出ている。昨日は結局、街の中心部に買い物に出かけることができなかった。

「一瞬一生の会」の第3期が始まり、初回のクラスの振り返りに関する音声ファイルを作っていると、思いの外長くなり、午後に2時間ほど1人で話をしていて、夜寝る前にも1時間弱1人で話をしていた。合計で3時間ほどの音声ファイルを作ったことになる。この3時間とクラスの2時間を合わせると、

昨日は一瞬一生の会に5時間を充てたわけなのだが、それでも映画は5本見た。映像の持つ力は強く、それが良い意味で覚醒意識の世界と無意識の世界の双方に揺さぶりをかけている。こうした揺さぶりをかけてくれるというのは、自分の中での良い映画の1つの条件である。

昨日見たスウェーデン映画の『鏡の中にある如く(1961)』という作品を改めて思い出す。これは、イングマール・ベルイマン監督の「神の不在3部作」の1作目に該当する作品だ。本作品もまたすぐに理解できない箇所があったが、いくつかの台詞が印象に残っている。台詞通りではないが、「人は円を描いてその中で生きている。時にその円が何かをきっかけにして破られる。そして人は、新たな円の中で生きていく」という意味の言葉と、「私の生きるよすがは、愛に満たされているということではなくて、この世に愛が存在するということだ」という意味の言葉である。

これら2つの言葉については、少し立ち止まって考えていた。今日もまた映像作品を積極的に見ていこうと思う。映像を通して訴えかけられるものを感じ、その感覚をもとに何かを考えていくこと。自己と世界に対する理解を、映像を通して深めていくこと。それを今日もまた行っていく。

辺りはうっすらと明るくなり、通りを走る車の音が聞こえてくる。フローニンゲンもめっきり寒くなり、昨夜から湯たんぽを使い始めた。ここから長い冬に突入し、例年の経験上、湯たんぽは5月上旬まで使うことになるだろう。

今朝方の夢が微かな記憶を持って自分の内側に滞留している。夢の中で私は、ある有名な日本人サッカー選手と、ある社会学者の教授と話をしていた。場所は、その選手が所属するサッカーチームのクラブハウス内のカフェだった。私たちは窓側の席に腰掛けて、窓の外に広がる数面ほどのサッカーグラウンドを眺めながら話をしていた。そこでサッカーの話をするのかと思いきや、教育の話になった。そのサッカー選手はオランダのチームに在籍していたこともあり、オランダの教育にも精通しているようだった。

その選手が教育の話題を切り出し、話は日本とオランダの教育で盛り上がった。その選手の教育に対する洞察はとても深く、私たちは共感の念を持って話を聞いていた。今朝方の夢で覚えているのはそれぐらいだろうか。その他に覚えていることと言えば、見知らぬ日本人女性と話をしていたこと

ぐらいだ。私は彼女に何か物を渡していたように思う。それがなんだったのかはもう記憶にないが。
フローニンゲン:2020/11/17(火)07:55

6411. 芝居が持つ治癒と変容効果:『大鹿村騒動記(2011)』を見て

静かな時間が流れている。そして、濃密な闇の世界が外の世界に広がっている。

時刻は午後7時半を迎えた。今日もまた、とても充実していた1日だったと思う。今日は珍しくオンラインミーティングが2件あったのだが、そうした中でも時間をうまく作って、映画を4本ほど見た。現在貪るように映画を見ている自分にとって、1日に4本というのは見たうちに入らない微々たる数なのだが、そうしたことをいちいち気にすることなく、少しずつ映画を通じた探究を進めていけばいいと自分を宥めるように言い聞かせた自分がいた。

つい先ほど見終えた、園子温監督の『希望の国(2012)』という作品の中に出てきた言葉にあるように、大股で歩いていくのではなく、一歩一歩歩いていけばいいのだ。大股で歩こうとするのは虚勢的であり、作為的なのだ。そうではなく、自分にとって自然な歩幅で一歩一歩進んでいけばいい。

本日見ていたその他の作品の中で印象に残っているのは、阪本順治監督の『大鹿村騒動記(2011)』という作品である。邦画にも非常に良い作品はたくさんあることを改めて感じる。この作品を見ながら取っていたメモは多岐に渡る。取り留めもないが、備忘録がてらここにまとめておきたい。

この映画を見ながら、先日一時帰国していた時に、金沢で訪れた金沢能楽美術館での体験を思い出し、本作で取り上げられている歌舞伎も興味深い伝統芸能だと改めて思った。作品の中でも描かれていたように、想像力を働かせ、芝居をすることによって、身分や地位に関係なく私たちは何にでもなれることを知る。

本作の中で、リニアモーターの誘致に関して村が分裂寸前だったが、村人たちが一緒になって歌舞伎の芝居に向けて稽古をしていくことを通じて、村が一体感を取り戻していくところが印象に残っている。芝居のみならず、祭りを含め、何か私たちを非日常的な世界にいざなってくれるイベントに一丸となって向かっていく際には、なんとも言えない一体感が生まれる。学生時代の記憶を遡ってみれば、文化祭や合唱コンクール、そしてスポーツの大会など、一体感を醸成してくれるイベントが

随分とあったことを懐かしく思い出す。そうしたイベントに向かう過程の中では、時に対立や不和が生じる。だが、それらを乗り越えてイベントを終えた時、もはやそのイベントの前とは比べものにならないほどの共同体意識のようなものが芽生えていることは注目に値するのではないかと思う。このあたり、企業社会における仕事やプロジェクトにおいて、祭りや芝居の要素はどれほどあるのかを改めて問う自分がいた。端的に述べてしまうと、1つ1つの仕事やプロジェクトが、一体どれほどチームや組織の一体感を醸成することにつながっているのだろかという問題意識と、仕事やプロジェクトの祭り事化･芝居事化の可能性を考えていたのである。

日常の自分の身分や立場、鎧を脱ぎ捨てて、無礼講を楽しむことの大切を改めて思う。現代人を見ていると、ある特定の役割だけに縛られる形で日々窮屈そうに生きている姿を見る。既存の役割を脇に置き、ちょっと別の役割を演じてみることによる非日常体験と、それがもたらす治癒を蔑ろにすることはできない。演技や芝居を通じた教育効果やヒーリング効果に関しては、研究も進んでおり、教育においては、シュタイナー教育で演劇は非常に大切にされている。フランス哲学者のドゥルーズの考え方を採用すれば、現代人は大なり小なり精神分裂症（統合失調症）を患っており、バラバラな人格を癒しながらにして人格統合を図っていくために、芝居や演技の観点や実践は大切なのではないかと思う。

本作の最後のシーンはとても印象的だった。物語は主役の風祭善が「ぜんちゃんは俺だよ～…あれ～？」と述べたところで終わる。最後のシーンを見た時、この問いは「Who am I?」という究極的な実存的問いが主人公の中で芽生えたということなのではないだろうかと考えていた。「自分はぜんちゃんと呼ばれているが、ぜんちゃんって誰なんだ？果たして自分とは何者なのか？」という極めて重要な問いが主人公の内側から自発的に湧き上がったのである。このような問いが立ったのは、歌舞伎を演じることによって、自分という存在に揺らぎが起きたからなのだろう。芝居というのは、このような変容効果がやはりあるのだ。そのようなことを実感させてくれる素晴らしい作品だった。フローニンゲン：2020/11/17（火）19:51

6412. 今日の計画/今朝方の夢

今朝は午前4時過ぎに起床し、今、時刻は午前5時に近づいてきている。ちょうど先ほどから1羽の小鳥が鳴き声を上げ始めた。その小さな鳴き声が、今、外の静かな闇の世界に響き渡っている。闇

の世界にも響くものがあるのだ。この世界がいくら闇に包まれていようとも、ある響きは光として闇の世界を照らしていく。そうしたことを教えてくれる。

幸いにも、今日は晴天に恵まれるとのことでとても嬉しい。ここ数日間は雨が断続的に降るような日々であり、久しぶりに太陽の姿を拝むことができる。朝は少し曇っているようだが、仮に朝日が出てきたら、しっかりとその姿を見届けよう。

今日は午前中のどこかで時間を作り、インテグラル理論に関する音声ファイルを作成していく。予定では9個ほどの音声ファイルを作り、インテグラル理論の動画コンテンツのスクリプトのレビューをし、今夜に協働者の方に連絡をしようと思う。その他にも、今日は発達測定に関するレビューの仕事もある。そちらは夕方に取り掛かろうと思う。これらの仕事に並行する形で、今日もまた旺盛に映像作品を見ていく。昨日見た作品からは大いに学びが得られ、今日もまたどのような学びが得られるのか今から楽しみだ。

小鳥の鳴き声が止み、濃い静寂さに世界が包まれた。そんな中、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、東京のような雰囲気を発している日本の街を歩いていた。時刻は午前中であり、昼に近いというよりも朝日が昇る時間帯に近かった。

これから通勤や通学が激しくなる街をしばらく歩いていると、小中高時代の友人（SN）に遭遇した。私は自分がどこに向かっているのかよくわからず、そもそも行きたい場所などなかったので、彼がどの駅に向かっているのか尋ね、とりあえず東京駅にでも行こうかと思った。するとどうやら、ここは関西のようだと判明し、そうであれば京都駅に行こうかと思って駅構内に入ることにした。その瞬間、私の体はビュッフェ形式のレストランの中にあった。

ちょうどこれから客で混む時間帯のようであり、その前に昼食を済ませておこうと思った。私はヴィーガンのため、野菜を中心に取っていき、スープのコーナーでふと立ち止まり、そこに塩サバの切り身が置かれていることに気づいた。普段は魚も食べないのだが、そのサバの切り身は美味しそうに思え、それを取ろうと思ったところ、やはり気が変わって、サバを食べることをやめた。一度野菜を自分のテーブルに置いて、その後、もう少し野菜類を取っておこうと思って再び料理のところに向かっ

た。すると、普段は食べないスイーツに目が行き、ナッツと豆腐でできた健康そうなスイーツを少々いただくことにして、それを小皿に取った。

すると気がつけば、もう制限時間2時間の終わりに差し掛かっていることに気づいた。私は11:24に入店をしたので、13:24までに会計を済ませる必要があった。その時間を1分でも超えると、延長料金が発生するらしかった。結局スイーツはレジに向かって歩きながら食べることにし、途中で昼間からビールか何かの酒を飲んでいるビジネスマンに声を掛けられ、「あなたもどう？」と絡まれたが、その男性を振り払う形でレジに向かった。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン：2020/11/18（水）05:07

6413.本日の振り返り/『みなさん、さようなら（2012）』を見て

時刻は午後7時半を迎えた。今日は本当に素晴らしい天気だった。雲ひとつない快晴が続く午後、街の中心部に出かけていき、とても清々しい気持ちになった。それは春や秋の清々しさとは別種の感覚を引き起こし、冬の午後ならではの爽快感があった。

明日は午前中から午後にかけて小雨が降るようだが、また明後日は晴れのようなので、その際には今日と同じように太陽の光を浴びたい。ここからますます太陽の光が貴重な時期になってくる。

今日は午前中と午後にかけて、この秋にアントレプレナーファクトリーさんとの協働で作成したインテグラル理論に関するコンテンツの原稿のレビューと、補足的な音声ファイルを作成していた。音声ファイルに関しては、想定していたよりも多くの時間を話すことになったが、結果としてより多くの情報を届けられるという点においてそれは良かったように思う。レビューに関してはもう少しばかり見ておきたい箇所があるのと、おそらく最後にもう一度後日原稿のレビューをした方が良さそうだと思った。今夜中に先方にメールをしておこう。今日はその他にも、発達測定に関するレビュー業務も行っていた。そちらは午前中に完了し、レビュー結果については後ほどメールをしておく。

今日は買い物に出かけることによって外の空気を吸い、そして仕事も充実していた。それに加えて、今朝は午前4時に起床していたこともあり、映画も5本ほど見ることができた。買い物に出かけた時間、そして仕事に充てていた時間を考えると、5本の映画を見れたことは喜ばしく、何よりもそれら1つ1つの映画から考えさせられることが多くあったことは嬉しいことであった。

つい先ほど見終えた『みなさん、さようなら(2012)』という邦画は、小学校を卒業した主人公が「一生、団地の中だけで生きていく」と宣言してその通りに生きていく姿を描き、彼がどのように成長していくのかを描いている物語である。自分自身が幼少期から青年期にかけて、社宅という団地で長らく生活をしていたこともあり、物語の設定は興味深く、また当時の団地生活を懐かしく思った。団地の中だけで生活が完結するというのは一見信じがたいように思えるかもしれないが──物語上の団地には商店街や公園などがあるため、正直なところ極端に狭い生活空間とは言えないかもしれない──、実際のところは、私たちの生活空間というのは思っている以上に狭く、団地から一歩も外に出ないのとさほど変わらないのではないかと思った。

それくらいに私たちは、実際には狭い世界で生きている。また、「同じ団地で暮らしていても、1人1人の世界や体験は違う」ということを意図する主人公の発言は、その通りだと思う。仮に同じ空間で生きていたとしても、体験される事柄は全く違い、生活世界がいかに狭かったとしても、内面の世界を深めていくことは可能なのだ。そのようなことを思いながらこの映画の鑑賞を楽しんでいた。明日と明後日にも仕事があるが、本日と同じく積極的に映画を見ていき、週末にはさらに集中的に映画を見ていきたいと思う。フローニンゲン:2020/11/18(水)19:49

6414. 今朝方の夢

時刻は午前8時を迎えた。先ほどまで小雨が降っていたが、今は小雨が止んでいる。先ほどまで降っていた雨の雨滴が窓ガラスに付着していて、窓から外を眺めると、少しばかり強い風が吹いている。

街路樹はもう立派に紅葉していて、紅葉した葉が風に揺れている。天気予報を確認すると、今夜は4度まで気温が下がり、明日の最高気温は8度とのことである。明日はかなり冷えそうだが、晴れ間が見えるとのことなのでそれは嬉しい。

秋が深まった朝空を眺めながら、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、ゴールデンゲートブリッジの橋の下にいた。そこには小中学校時代の友人(KF)がいて、彼と話をしていた彼としばらく話をしていると、突然携帯電話が鳴った。電話を取ると、コーチングクライアントからの電話

であり、今から電話を通じてコーチングセッションをして欲しいと言う。ちょうどそのクライアントとは後ほどセッションがあり、結局前倒してセッションをスタートさせることにした。

私は風の音が電話に入らないように、ゴールデンゲートブリッジの橋の下で風よけになりそうな場所を見つけて、そこで電話を続けた。そのクライアントは、ある製造会社に務めていて、生産工場の重要なポジションに就いている定年間近の男性である。どういうわけか、セッションにはその方の息子さんも参加していて、最初3人で話をすることになった。息子さんもどうやら同じ工場で働いているらしく、年は私よりも少し若いぐらいだった。

しばらく3人で話を進めていると、気がつけば私はゴールデンゲートブリッジの橋の下ではなく、橋の上にいた。それは橋の上の道路という意味ではなく、文字通り、橋をかけるアーチの上にいたのである。私は恐る恐るハイハイをするようにそのアーチの部分を進んでいき、友人も一緒に動くとアーチから落ちてしまうように思えたので、友人にはその場にとどまってもらうようにお願いをした。私は一度、アーチの向こう側の近くまでハイハイで移動し、しかしながら最後の最後で向こう側に行くことが怖くなったので引き返し、結局気づくとまた橋の下にいた。

すると、私の体は瞬間移動し、クライアントが務める生産工場の中にいた。クライアントの工場長が、工場内を歩きながらセッションがしたいとのことであり、色々と歩き回りながら話を聞いた。その途中に、工場で働いている人たちと会うたびごとに彼らを交えた雑談がそこで展開された。工場長曰く、会社の上層部から、サンフランシスコ工場の生産量を増やすように指令が来ているらしく、それは工場の生産能力を考えると、到底不可能とのことだった。

上からの生産命令がどれだけ現実的ではないかを工場長は他のメンバーと議論したいようだった。他のメンバーも軒並みその生産計画は不可能だと述べていた。私はそこで、その生産計画を立案した上層部の人間の前提や考えを一度確かめてみるのはどうかと提案した。ひょっとすると、工場の生産能力を高めるような施策が背後で進められている可能性があり、その他にも諸々の可能性があると思ったのである。

工場のある会議室の壁に取り付けられた時計をふと見ると、1時間のセッションが2時間40分ほどになっていた。午後1時から始まったセッションが、もう午後3:40だったのである。私は午後2時からあ

る講義に参加することになっていて、初回のクラスを逃してしまったようだった。いつの間にかクライアントの男性はどこかに行ってしまい、もうそこで今日のセッションはやめにしようと思った。

会議室を出ると、私が参加する予定だった講義に参加している1人の女性と偶然出会った。彼女がそこにいるということはもう講義は終わったのだと思い、講義の様子を尋ねた。次回はなんとか講義に出ようと思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/11/19（木）08:40

6415. 今朝方の夢の示唆とその他の夢

時刻は午前8時半を迎えた。空には先ほどまで雨を降らせていた雨雲がまだ残っているが、先ほど朝日が地上に降り注いだ。その時に、朝日によって紅葉の葉が照らされる光景に遭遇し、その美しさにしばし見入っていた。秋の輝きはこうしたところにあり、その他にもたくさん輝きがあることを再度思い出そう。

つい先ほどまで今朝方の夢について振り返っていた。先ほど振り返った夢の中で、ゴールデンゲートブリッジの橋の下にいたこと、そして橋の上のアーチ部分にいたことの意味について考えていた。とりわけ橋の上のアーチをハイハイをしながらゆっくり進むという行為と、それを行っている時の高揚感と恐怖心について考えていた。

橋の上のアーチからの眺めは素晴らしかったが、ちょっとでも誤ると、橋から落ちてしまうという恐怖があった。またそもそも誰もそのようなことをしておらず、前例のないことを自分が行っているという自覚もあった。このあたりは何か現在の生活を映し出している部分があるように思える。橋の上のアーチを進みながら、結局最後の最後で反対側の部分に行かずに、アーチを引き返したこともまた興味深い。正直なところ、向こう側に渡り切ってしまう方がよほど安全だったはずなのだ。

なぜ私はわざわざアーチの最も高い部分を再度ハイハイで逆戻りするようなことをしようと思ったのだろうか。そちらの方がよほど危険である。そうした危険すらも楽しむような自分がいるということだろうか。少なくとも、夢の中の自分は、そうした危険を楽しむという心の余裕はなく、恐怖心の方が強かったように思う。早く橋の下に戻りたいと思っている自分がいたのである。

ケン･ウィルバーの過去の仕事を眺めてみた時に、アーチをモチーフにした発達モデルを提唱していた時期がある。特に『アートマン･プロジェクト』の中でアーチを使ったモデル図が示されている。一度アーチの最後の箇所まで進んでいき、そこからアーチの最初に戻る。仮にそれが円環的な形で行われているのであれば、健全な発達かもしれないが、夢の中の私が行っていたのは、単にアーチを逆に進むというある種の退行運動のようであった。それが果たして退行なのか。それも今少しばかり考えを巡らせている。

一度アーチの反対側をこの目で見たということ、そしてそこまで自分が自らの手と足で進んだということ。そうした直接体験が橋の下に戻った自分の中にありありと残っており、その直接体験はすでに自分の中に何かしらの影響を与えていたことは確かである。

今、また小雨が突然降ってきた。空は明るいのだが、風で雨が運ばれてきたのかもしれない。雨雲が濃くないのに雨が降ることはオランダではよくあることである。小雨の輝きを眺めながら、そういえば、今朝方はもう少し別の夢を見ていたことを思い出す。

私はオランダのライデンかどこかの街の駅にいた。その街で何か用事を済ませ、今からフローニンゲンに戻ろうとしていた。乗りたい列車の時刻が迫っていたのだが、列車が到着するプラットホームがどこかわからず少し焦っていた。いつもは5番プラットホームにその列車が来るはずだと思い、そこに向かったが、電光掲示板には何も表示がなされておらず、どこに行けばいいのか迷っていた。

するとアナウンスがあり、9番プラットホームに列車が到着するとのことだった。私は急いでそちらに向かった。だが、もう列車の出発まであと1分しかなかったので、もう無理かと思い、同じように走ってプラットホームに向かっている男性に声をかけた。その男性は韓国人であり、年齢は私よりも少し若いぐらいだった。「もう間に合いそうにないですね」というようなことを私が述べると、彼は笑顔でうなづいた。

そこからは走ることをやめ、ゆっくりとプラットホームに向かって行き、次の列車に乗ることにした。プラットホーム向かっている最中に、彼とサッカーの話になった。実はちょうど私は先日までイギリスにいて、プレミアリーグの試合を見ていたのである。韓国の英雄ソン･フンミンが所属するトットナムと、同じくロンドンに拠点を置くライバルチームのチェルシーとの試合を見てきたところだった。また、

チャンピオンズリーグの試合も1試合ほど現地で見ていて、彼とはその2試合の話で盛り上がった。
フローニンゲン：2020/11/19（木）09:03

6416. 澄明な夜の世界の中で

静かに流れ出て来る言葉。自分の言葉は自分のものではなくなった。それは確かに自分という1人
時刻は午後8時を迎えた。静かな夜の世界が辺りに広がっている。

今日はいつもより遅く起床し、そして午前中に1件ほどオンラインミーティングがあったのだが、それでも映画を6本ほど見た。今日見た映画からも多くのことを考えさせられ、良い作品がもたらしてくれる自己の世界の揺れを体験していた。映画に関する知識と理解を深めたいという思いから、映画関係の書籍を読むだけではなく。Spotify経由で映画批評のポッドキャストを聴き始めている。英語空間にはいくつか興味深い映画批評のポッドキャストがあり、今後は少しずつそれらを聴いていこうと思う。

私たちはいつも今日に生きていて、今に生きているということ。そう、いつも今日だというのは本当に不思議だ。そして、絶えず今だということもまた不思議である。過去や未来に思いを巡らせることはあっても、一度たりとも過去や未来に生きたことがないということ。これはよくよく考えると本当に不思議なことである。その点について考えてみると、自己即今日、自己即今ということが言えるのではないかと思ってしまう。自己は今日であり、自己は今なのだ。

ふと書斎の窓の外を眺めると、澄明な闇の世界が広がっている。それは澄明な心の世界と対応している。

明日は今日よりも早く起床し、映画の鑑賞と作曲実践を交互に行っていく時間をより多く過ごしたい。こうした生活を何かが突き破られるまで続けていく。いつかきっと何かが突き破れ、その時になって初めて実践と生活のあり方を変えていく。今はとにかく1日の時間のほぼ全てを映画鑑賞と作曲実践に充てていけばいい。没頭没入によってしか到達できない世界があり、何かを突き破ってしか辿り着けない境地があるのだ。

「地上で楽園を生み出そうとすることは、不可避的に地獄を生み出す」というカール･ポパーの言葉を思い出す。この言葉は本当なのだろうか。今の現代社会を見ているとそうかも知れない。だが、果たしてこうした状態は今に始まったことなのだろうか。この世界が最初から地獄であったと考えるとどうだろう？あるいは、そもそもこの世界は楽園や地獄を超えたものなのではないかという気もしてくる。楽園でも地獄でもないこの世界をより多面的に深く理解したいという思い。そうした思いが映画鑑賞に駆り立てているのかも知れない。フローニンゲン：2020/11/19（木）20:09

6417. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。先ほど小雨が降り始め、今もまだ小雨が降っている。外は真っ暗であり、今朝は雨のためか、小鳥たちの鳴き声が聞こえてこない。毎朝、静かな朝を味わえること。それに感謝をしよう。

闇と静けさに包まれた世界の中で、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、実際に通っていた中学校に似た雰囲気の学校の教室にいた。その日は晴れていて、午前中の授業が行われていた。私の席は教室に向かって左側の窓際の一番前の席だった。私の後ろには、親友（HO）が座っていた。

授業が始まると、先生が今度の数学のテストはパソコンを用いて行うと述べた。より具体的には、海外の会社が作った英語で実施される数学のテストをウェブサイトにアクセスする形で各自受験せよとのことだった。試しにそのウェブサイトにアクセスできるかをその場で確認することになった。各々の生徒がノートパソコンを立ち上げ、私も自分のパソコンを立ち上げた。

するとなぜだか、パソコンからテレビ番組が再生され、突然テレビの音が鳴ってびっくりしてしまった。私はすぐに音量を下げ、早くテレビ番組を消そうと思ったが、どういうわけかそれを消すことができない。困った挙句、テレビ番組はそのままにしておいて、音をミュートにして対処することにした。

すると、後ろに座っている親友がおもむろにマリファナを吸い始めた。私はマリファナのあの甘ったるい煙が好きではなく、こんなところで吸うなよと思ったが、親友は先生がいても一向にお構いなしにマリファナを吸い続けていた。挙げ句の果てには、さらに後ろに座っていた見知らぬ男性に煙を

吹きかけるという行動に出た。その煙は辺りに充満し、周りにいる人たちの意識状態が変容して行った。しかし、自分にはそれほど効かなかった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は日本家屋にいた。そこは武家屋敷のようにとても大きな屋敷だった。私はそこで日本人の人たちと共同生活を行っているようだった。ちょうど朝目覚めた時に、部屋の近くにある土俵から声が聞こえて来た。部屋を出て、土俵のある庭に向かってみると、そこで相撲大会が行われていて、プロの力士たちが相撲を取っていた。観客は随分といて、みんな楽しそうな表情を浮かべていた。

しばらく相撲を見た後に、部屋に戻る前に屋敷の中の土産屋に立ち寄ることにした。そこでは和菓子や手打ち蕎麦などを購入することができ、私はオーガニックの栄養豊富な蕎麦を購入しようと思った。蕎麦を買って部屋に戻ろうとしたところ、途中で道場の脇を通った。ちょうど今から朝の瞑想が行われるらしく、道場には人が随分と集まっていた。

どのような人が来ているのか、またどのような人が瞑想を指導するのかに関心があったので道場を覗いてみたところ、とある新興宗教の団体だとわかり、その団体は特に悪事を働いているわけではないが、あまり関わらないようにしようと思い、私は道場から出た。そして部屋に戻り、部屋から外を眺めると、朝日に照らされた外の世界がとても美しく思えた。どこか柔らかい黄緑色に世界が知覚されたのである。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私はオランダの空港に到着したところだった。一度ゲートの外に出る必要があったのだが、なぜだかゲートの外に出れなかった。というよりも、どこから出ていいのかよくわからなかったのである。ゲートの一旦外に出て、再びゲートの中に戻って来て、再度フライトに搭乗する必要があった。目的地はおそらく日本の関空だった。

ちょうど近くに親友（HS）がいたので、彼に外の出方について尋ねてみた。彼の回答は、私が思っていた通りのものであり、とても普通のことだった。だが、どうしても外に出る場所が見つからなかった。今回は乗り換えという形式を取ることになっていて、乗り換えをするためには携帯から搭乗券を見せる必要があったので、親友の彼にwifiのパスワードを聞いた。空港のwifiを使うのではなく、ちょ

うどそこはラウンジのwifiが飛んでいて、彼がラウンジのwifiのパスワードを知っているようだったので、それを教えてもらって打ち込んだ。

するとログインすることができず、emailは彼のものにする必要があったと気づいた。そのため、彼のemailアドレスを聞いたが、込み入ったアドレスだったので、彼に打ち込んでもらうことにした。無事にログインができたところで、彼と分かれ、乗り換えのために通過すべき場所に向かっていこうと思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/11/20(金)06:42

6418. 換喩的な還元と飛躍/犯罪系映画から考える悪について

時刻は午後7時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、1日を振り返る日記を書いている。

今日は幸いにも早朝の小雨を除き、午前中から晴れ間が広がり、1日を通して晴れだった。気温はもう随分と低くなって来ているが、まだ肌を刺すような冬の厳しさはない。徐々に寒さに慣れることができるような親切な形で季節が進行している。気がつけば、日本に一時帰国してオランダに戻って来てから10日以上が経っている。そして、あと10日ほどすれば、もう12月がやって来る。今年最後の月がもうすぐやって来る。

王冠は王を象徴するという換喩的な形で現象を矮小化させてしまう現代社会の傾向について考えていた。換喩というのは、言葉の類似性や関係性に基づいてある事物を表す指す。アメリカの戦争映画を見ていて、ある1人の兵士の死が、国への貢献というような描き方をされている場合に、そこに何か換喩的な飛躍のようなものが感じ取られ、少しばかり気持ち悪く思えてしまう。

今日は1件ほどオンラインミーティングがあったが、6本ほど映画を見た。4つの洋画を見て、2つの邦画を見た。1つ1つの映画から汲み取るものはそれぞれ異なり、リアリティの拡張の性質も異なるものがあった。『コズモポリス(2012)』という映画を見ながら、現代社会の加速度的な時間の流れを元に戻す力がいつの日か働くのだろうかと考えていた。時間の破れが生じ、社会システムか何かが崩壊したときにそうした日はやって来るかも知れない。本日見た『イノセント・ガーデン(2013)』にせよ、『ザ・ゲスト(2014)』にせよ、はたまた昨日見た『ブレイン・ゲーム(2015)』にせよ、殺人を犯す犯人の動機や目的を深く探っていくことの大切さを思う。

殺人を題材にする二流映画は、悪をなすことの背景には何も触れず、殺人犯を単なる悪人に仕立て上げてしまう。だが洞察に溢れる犯罪映画は、そうした野暮なことをせず、犯人の犯行動機の機微を描くか、それを匂わせることを必ずする。端的には、そうした映画においては、悪人が必ずしも単に悪人として非難できないように描かれているのである。もっと言ってしまえば、犯人と同様な状況や立場に置かれたら、私たちも同様の行為に出てしまうのではないかと考えさせられる形で彼らが描かれている。そして、彼らの悪事が果たして本当に悪事だと言えるのだろうかという内省的な問いを私たちに突きつけてくれる。ひょっとしたら彼らの行為は正義なのではないか、善なのではないか。そのようなことを考えさせてくれるのだ。

明日はオンラインミーティングは何もなく、映画やドキュメンタリーを見ることに集中したい。明日と明後日の両日に音声ファイルを作成することを計画しているが、それ以外の時間は作曲と映像作品の鑑賞、そして少々読書をしたいと思う。振り返ってみると、今週もまたとても充実していた。フローニンゲン：2020/11/20（金）19:46

6419. 情報過剰な日本の街

時刻は午前6時半にゆっくりと近づいて来ている。辺りが静かなせいか、今、遠くの方から列車が走る音が聞こえた。厳密には、列車が走り抜けていく音ではなく、列車が通ることを知らせる警報音が鳴った。

言葉の過剰さ。情報の過剰さ。昨晩はそれについて考えていた。この間日本に一時帰国した際に、様々な場所に足を運び、もちろん日本にも街並みが美しい場所もあることは確かだが、総じて街の景観があまり美しくないと感じられた。

これはよく言われることだが、日本においては街並みを美しくするような街づくりの発想が欠落している。「欠落」という言葉が言い過ぎであれば、「希薄」であり、「未熟」であると述べた方がいいだろうか。おそらく建築的な意味での街づくりに失敗しているだけではなく――建物のデザイン、景観を害する無数に張り巡らされた電線など――、端的に情報が過剰な街づくりになってしまっているという今回改めて気づかされた。看板や標識などの言語的情報があまりにも過剰なことに気づき、大都

市においては、音声による丁寧すぎるほどのアナウンスなどがあり、それもまた情報過剰だと思った。

エスカレーターに乗れば、「手すりにつかまってください」「足元に注意してください」などの情報が流され、新幹線乗り場のトイレに入った時には、「多目的トイレは…」というような音声アナウンスが流れていた。多目的トイレのアナウンスが流れていることに気づいた時、大いに笑った。もちろんそれはある種の苦笑いだが、そこまで情報過剰な社会になってしまっているのかと少々呆れてしまった。同時に、こうした情報過剰な中で日々生きていると、情報による疲弊からの情報による窒息が起きてしまうのではないかと思った。

人々を観察していると、こうした過剰な情報に飼い慣らされ、感覚が随分と麻痺し、鈍麻している姿が見受けられた。情報過剰な環境にさらされることによって、種々の感覚が麻痺し、大切なものに感覚を向けていくことからどんとんど離れ、自分を見失っている姿が観察されたのである。

日本からオランダに戻って来た時の安心感がどこからもたらされるのか。その理由の1つが新たに分かった気がする。端的には情報過剰な環境からの解放である。オランダの街、いやヨーロッパの街の多くは、総じて情報過剰になることを良しとしない、あるいは美しいとしない発想に根差して設計がなされているように思う。当然ながら、商業地域における景観は日本のそれとさほど変わりなく、派手な広告看板などが掲げられているが、そうした場所から離れた時の街の景観に美しさや安堵感を感じさせてくれるのはヨーロッパの街の特徴かと思う。今住んでいるフローニンゲンにおいてもまさにそうした特徴があり、とりわけ自宅の周辺においては情報過剰とは全く逆の環境が広がっている。

環境が私たちの心にどれだけ影響を与えるのかという環境心理学の観点からしてみると、日本の閉塞感の理由は、実は街の景観ともつながっているように思える。そしてその背後には、むやみやたらに情報や物質（電線など）を飾り立てていくような街づくりの発想があるのではないかと思えて来る。昨晩はそのようなことを考えながら就寝に向かっていた。フローニンゲン：2020/11/21（土）06:41

6420. 日本の閉塞感/今朝方の夢

日本の大都市や地方都市を訪れたときに感じたなんとも言えない哀しみの感覚の理由の1つが、過剰な情報によって飾り立てられた街の景観であることに気づいたことは自分にとって新しい発見だった。なるほど、街が呼吸を苦しそうにしていて、そこで暮らす人々もまた苦しそうに呼吸をしていたのは、そうした情報過剰な街づくりによるものだったのだと納得する。街に関しては、物質的にも精神的にも呼吸が苦しそうであった。人々に関しては精神的な呼吸の苦しさを強く感じた。

街づくりという観点から見ると、日本があれほどまでに景観を害するような街づくりをし始めたのは歴史上いつであり、またなぜそのような方向に街づくりをし始めてしまったのだろうかと考える。直感的には欧米化を押し進めようとした明治時代あたりなのだろうか。

欧州と米国の双方で暮らして来た経験からすると、欧州の方が米国よりも街並みはやはり美しく、日本は果たしてどの国に範を求めて街づくりをしようとして来たのだろうか。端的に言えば、どこの国を真似たとしても、明らかに模倣の失敗である。秩序をもたらす混沌ではなく、混沌しか生み出さないような混沌とした街並みを見るたびに、とても心が痛む。そうした体験を先日の日本の滞在中何度もしていた。

人々の心は感動の涙が出にくくなっているほどに乾き切っているのに、街を泣かせるというのはどういうことだろう。政治経済的な混迷のみならず、生活空間における混迷の中に入ってしまっているのが我が国の現状だろうか。

昨日に引き続き、今朝方もまた夢を見ていた。感覚として、少しばかり否定的な感じをもたらす夢だった。何か不安や焦りのような感覚があったのを覚えている。また、夢の中の自分は日本語だけを話していたことも覚えている。いや、一箇所だけ、オランダ人の友人か誰かと英語で会話をしている場面もあった気がする。

いずれにせよ、今朝方の夢の中では、日本語優位な状態であった。夢の具体的な場面については、もう随分と忘れてしまっている。不安や焦りを生んでいたものは一体なんだったのだろうか。

どこか目的地に向かう際に時間がなくなって来ていることに対してであったか、それとも何か取り組まないといけないことが差し迫っていることだったか。そのあたりの記憶はもう曖昧になっている。

夢の中の舞台は、日本の街と欧州の街を混ぜたような感じであった。明確に日本だとは言えず、明確に欧州だとも言えないような街並みが広がっていた。そうした夢を見る前、昨夜にふと、バタフライ効果やカルマ、そして生まれ変わりをテーマにした映画を探してみようと思い、枕元の裏紙にメモをしておいた。今日はまずそうしたテーマの映画がないかを調査し、該当する映画を見つけた都度映画リストに加えていく。

可能であれば、今日いずれかの映画を見たいと思う。ここ2日間は仕事をしながらも毎日6本ほど映画を見ていた。今日と明日は協働プロジェクト関係の仕事がないので、もう少し映画を見ることができるかもしれない。それがとても楽しみだ。フローニンゲン:2020/11/21(土)06:57